C'n scene news

千葉市美術館ニュース「C'n」(シーン)95号

「つくりかけラボ01　遠藤幹子｜おはなしこうえん」の様子（撮影：栗原論）

VOL. 95

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

［編集・発行］千葉市美術館　〒260-0013 千葉市中央区中央3-10-8　TEL. 043-221-2311　FAX. 043-221-2316　Chiba City Museum of Art　3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-0013, Japan
https://www.ccma-net.jp/
［発行日］2020年8月31日
［印刷］株式会社 エイチケイ グラフィックス

Instagram　ccma_jp
Twitter　@ccma_jp

館長のつれづれだより　悪所・吉原と文芸

浅草・浅草寺の学僧である塩入亮乗さんが「江戸時代の文化・文芸の発展に大きな力となった吉原をもっと世に（区民に）正しく知らせる必要があります」と、台東区文化財保護審議会の席上で発言されました。この塩入さんによる提案に対してわたしに異論はむろんありません。

わたしにはこんな記憶があります。もう30年以上も前のことです。日本美術史を研究する大学院レベルの学生たちが集まり、討議する国際学会（通称：JAWS）の場で、浮世絵に関する研究発表を行ったアメリカからやってきた学生が、流暢な日本語で浮世絵の研究発表を始め出すと、突然、「この売春婦が」と言い出し、会場から思わず失笑とため息が起ったのです。「なるほどそうなるね」ということも含めてです。遊女を売春婦と言うなら、その遊女を描いた浮世絵は、売春婦を描いた絵と言っても間違いではないでしょう。

しかし、江戸時代における吉原をめぐる文化を考えると「はてな?」と思ってしまう識者も少なくないと思います。遊女を女郎とも言いますが、夜鷹と呼ばれる街娼・私娼のような本当に最下級から、下級、中級、上級と、吉原の廓の内外に、場所や店を分けて、それぞれが働いていたようです。その最高位にあるのが、吉原花魁道中や明治時代の洋画家である高橋由一が描いたことで知られる花魁です。

格式の高い花魁と呼ばれる遊女たちには、そうとうの教養が求められたようであり、玉蟲敏子さんの高著『都市のなかの絵』には、藤堂梅花著の「青楼夜話」を引いて、花扇、瀧川、濃紫、粧ひなどの名を上げ、「書画・和歌・香・花・茶道・琴なとそれゝになせ共、させる風雅の聞きもなきことなり、花扇・濃紫など（沢田）東江の門人にて書をなせり、其比（酒井）抱一上人此廓中へ入こまれて光琳風画なと流行せり・・・」と述べられています。

わたしは以前、花扇が抱一風の画法で描き、それに抱一が賛をした「蝙蝠図」を見たことがありますが、玉蟲さんは、抱一が関わった遊女として、「身請けした大文字屋の香川をはじめ、同じく大文字屋の一もと、角町松葉屋の粧ひ、江戸町弥八玉屋の白玉、京町つるやの大淀など」を挙げています。このうち、粧ひは、儒者の亀田鵬斎や菊池五山など、文化文政時代の江戸の文人たちにも贔屓にされたスター的存在であったと言われ、抱一の俳諧や和歌の弟子であったばかりではなく、抱一が打掛の下着に「光琳松」をデザインしたほか、一年中の着物の下絵を担当していたと伝えられています。一方、妓楼の主（あるじ）や関係者にも、「かぼちゃ」と称した大文字屋市兵衛が良く知られるほか、「一六」の画名を与えられた見番大黒屋庄六の息子などが、抱一の弟子と伝えられていますが、「帰ってきた!どうぶつ大行進」展に展示された「朱鐘馗図」を描いた抱古もその一人です。また、抱一の愛弟子である鈴木其一の筆になる「繭玉図」の所持者、つまり絵の注文者ないしは支援者が、新吉原・仲之町の妓楼田毎屋（たごとや）の主人一賀であることもわかります。江戸琳派の画家たちと吉原の人々との親密な関係が知られます。

このように、画家、書家、儒者、国学者たちが、「江戸の遊里、吉原に侵入し、いわば遊女を飾り立てる意匠として文人趣味が及んでいく」と玉蟲さんは述べています。そしてそこには、歌麿や写楽を売り出した、浮世絵版元の蔦屋重三郎が、宣伝戦略の一環として若き日の太田南畝や山東京伝を利用したということがあったとも言っています。

仄聞するところでは「大吉原展」が、東京藝術大学美術館で企画されているとのことです。江戸時代後期に江戸の文芸、とりわけわたしたちに親しい浮世絵を生み、育む背景となった遊里・吉原を、いま、現代の眼で正当に見直そうとする機運が起こっているようにわたしには思えるのです。

［館長　河合正朝］

遠藤幹子 おはなしこうえん

「つくりかけラボ01　遠藤幹子｜おはなしこうえん」特集レポート

千葉市美術館4階に新設された「子どもアトリエ」で繰り広げられている新プロジェクト「つくりかけラボ」。今回は、第1回となる「つくりかけラボ01　遠藤幹子｜おはなしこうえん」のようすをお伝えします。

■「つくりかけラボ」とは?

「五感で楽しむ」「素材にふれる」「コミュニケーションがはじまる」のいずれかのテーマに沿い、アーティストが千葉市美術館に滞在し、来場者とかかわりながらインスタレーションを制作する参加・体験型プロジェクトです。制作はつねに、現在進行形。なので、いつでもだれでも、空間が変化しつづけるクリエイティブな「つくりかけ」を楽しむことができます。

撮影：栗原論

■「おはなしこうえん」があらわれた!

第1回は、建築家の遠藤幹子さんを迎え、「おはなしこうえん」と題したプロジェクトが進んでいます。「おはなしこうえん」の「こうえん」に込められているのは、だれでも物語の世界に入って遊べる「公園」と、そこで登場人物になりきって演じて遊ぶ「公演」のふたつの意味。わたしたちの暮らすまち・千葉に伝わる民話「羽衣伝説」を発想の出発点としています。

■開催情報
会期：2020年7月11日(土)～12月13日(日)
休館日・休室日：第1月曜日(8月3日、9月7日、10月5日、11月2日、12月7日)
観覧料：無料
会場：千葉市美術館4階 子どもアトリエ

■Instagram
ID：ohanashikoen

■特設ホームページ
http://shinbundobutsuen.com/ohanashikoen/
オンラインワークショップの開催情報は「おはなしこうえん」特設ホームページをチェック!

■「おはなしこうえん」の楽しみかた

なかで遊ぶ

現在進行形で変化しつづけている「おはなしこうえん」の世界に入りこむことができます。おはなしの登場人物になりきって遊んだり、ふしぎな仕掛け(!)を楽しんだり、楽しみかたはさまざま!

そとで作る

会場の外では、「おはなしこうえん」に登場するものを、新聞紙で作ることができます。ハスの花、松の木、カタツムリなど、作るものはどんどん変化! 出来上がった作品は、「おはなしこうえん」の一部になります。

おうちで楽しむ

会場に来られなくても大丈夫! おうちからも「おはなしこうえん」を楽しめます。動画を見ながらなにかを作ったり、作ったものをお披露目したり、遠くにいても「おはなしこうえん」に参加することができます。

■作家・遠藤幹子さんインタビュー

えんどうみきこ
遠藤幹子
建築家、一般社団法人マザー・アーキテクチュア代表理事

Q.「羽衣伝説」を取り上げたのはなぜですか。
千葉の物語、とくにここ千葉市中央区の物語をしらみつぶしに調べたところ、どの資料にも載っていたのが「羽衣伝説」でした。それから、美術館からも歩いて行ける千葉県庁のまえに「羽衣の松」があると知り、いちばん近しい物語だと思い、選びました。想像力が掻きたてられる美しいおはなしで、物語をふくらませる余地もあります。あとは、羽衣を編んでみたかった、というのもありますね。新聞紙で羽衣を編んだらおもしろいな、空想のものをみんなで作ったらおもしろいな、と思っていました。

Q.これから「おはなしこうえん」はどうなっていきそうですか。
これまで、ハスの花や葉っぱ、松、トンボ、かたつむり、羽衣などを作ってきて、こんどは、ちょんまげや身に着けるものを作る予定です。だんだん、なりきって遊べるものが増えてきました。お侍さんのポーズをしてみようとか、どんなふうに天女は飛ぶんだろうとか、物語のなかに入りこんでなりきることができます。これから、学芸会のような発表の場を設ける構想もあるので、そこへつながっていくといいなと思っています。

「帰ってきた!どうぶつ大行進」は9月6日(日)まで!

千葉市美術館の約10,000点にのぼるコレクションから、動物表現に焦点を当て紹介する企画展「帰ってきた!どうぶつ大行進」は、9月6日(日)が最終日。約250点が一挙に並ぶさまは、まさに「大行進」! 古今の多彩な動物イメージをお楽しみください。

9月19日(土)からは「宮島達男 クロニクル 1995-2020」がスタート!

世界で活躍する現代美術作家・宮島達男による、首都圏の美術館では12年ぶりの大規模個展を開催します。LEDのデジタル・カウンターを使用した作品や、パフォーマンス、参加者と協同で行われるプロジェクトなどを通して、人間にとって普遍的な問題である「生」と「死」を表現してきた宮島。本展では、千葉市美術館開館記念展「Tranquility—静謐」に出品された《地の天》(1996年)から最新作まで、大型インスタレーションをふくむ約40点を展示します。宮島が編み続けてきた四半世紀の年代記(クロニクル)をお楽しみください。

千葉市美術館拡張リニューアルオープン・開館25周年記念「宮島達男 クロニクル 1995-2020」
2020年9月19日(土)～12月13日(日)
開館時間:10:00～18:00(金・土曜日は20:00まで)
休室日:10月5日(月)、10月19日(月)、11月2日(月)、11月16日(月)、12月7日(月)

宮島達男《地の天》1996年 千葉市美術館蔵 Photo by Nobutada Omote

宮島達男《Counter Skin on Faces》2019/2020年 Courtesy of Akio Nagasawa Gallery Photo by Siliang Ma

ワークショップパートナーによるワークショッププログラムがはじまります!

今年度より、「ワークショップパートナー」という登録制度があらたにスタートしました。ワークショップパートナーは、千葉市美術館とタッグを組み、それぞれの専門性が光る体験の場を企画し提供する方々。幅広い年代の人たちへ、魅力的なプログラムを届けていきます! 各プログラムの詳細や参加方法などは、ホームページからご確認ください。

【9月・10月のプログラム】 ＼★すべてオンラインで開催!★／

マジカルインク×アート
9月5日(土) 第1回:10:15-12:15(10:00受付開始)
第2回:13:30-15:30(13:15受付開始)

講師:FLT(ワークショップクリエイター)
○○すると色が変わる?!不思議な「マジカルインク」を使って、オリジナルトートバッグを作ります。想い、描いて、考えて、自分の「好き」を思いっきり表現しましょう!

絵師の世界に触れる ～彩色・画材、自由に愉しむ 「ワタシ流」～
9月26日(土) 13:00-15:30

講師:桜井まどか(美エイジング®協会代表、アートセラピスト)
作品の時代背景や絵師に心を寄せ、ぬり絵状の絵画を彩色すれば、新たな発見が! ご家庭のクレヨン、サインペン、色鉛筆、絵の具等でのびのびと色彩表現を楽しみましょう。

ダンスであそぶアートする～ハロウィンダンスパーティーを演出しよう～
10月4日(日) 10:30-12:00

講師:長瀬陽子
(DANCE ASOBU CREW・ダンサー)
今年のハロウィンは子どもが主催のおうちダンスパーティー! 簡単なハロウィンダンスでイメージを膨らませ、オリジナルの衣装制作やステージ演出、装飾にもトライ。ダンスから広がる無限の想像を形にして、世界にひとつだけの素敵なパーティーを企画しよう。

気づいて話して楽しもう! みんなのアート鑑賞ワークショップVol.1
10月17日(土) 13:00-15:00

講師:橘高あや(アートエバンジェリスト協会認定インストラクター)
Zoomを利用し、千葉市美術館に展示されている名作の画像をじっくりみて、「わたしが気づいたこと」を語り合うオンライン・ワークショップ。みんなの「目の付け所」の違いを楽しみながら、鑑賞を深めていきましょう!

「カラダを通して味わうアート」
10月25日(日) 14:00-17:00

講師:高橋直裕(演劇ワークショップファシリテーター)

おままごとやヒーローごっこなど、私たちは子どもの頃から「真似して遊ぶ」ことで、その人やその世界を体感してきました。普段は眺めて味わうことが多いアートを、カラダを動かしながら味わってみませんか?

1階に新しいミュージアムショップがオープンしました!

美術館向かって1階左奥のスペースです。

ミュージアムショップ「BATICA」(バチカ)

本から雑貨まで、すてきな商品をそろえた新しいミュージアムショップがオープンしました! 千葉ゆかりの作家やメーカーのプロダクトも取り扱っており、地元のアートに触れることができます。もちろん、千葉市美術館オリジナルグッズもあります!

Instagram ID:batica_chiba

大人気のピンバッジ。売切御免の可能性大です。

トートバッグは3色展開! ロゴがかっこいい!

美術館の仕事を紹介します！

その9 日本画キット制作レポート

千葉市美術館では、今年度から、小・中学生向けの新しい鑑賞教育プログラム「みる・しる・できるびじゅつプログラム」がスタート※。「鑑賞」「表現」「体験」の3ジャンルを軸にした9つのプログラムから、好きなプログラムを選んで楽しむことができます。

今回は、「体験」プログラムのひとつ「さわれる美術館」で活用する日本画キットの制作のようすをレポート。前号で紹介した油彩画キットと同様、どのような素材や道具、技法を使って日本画が作られているかを、実際に触りながら学べるキットを作りました。日本画家の坪田純哉さんにご協力いただき、すばらしいキットが完成しました！

※新型コロナウイルス感染防止対策のため実施内容・形態が変更になる可能性があります。

坪田純哉さん（日本画家）

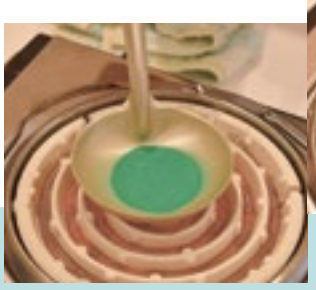
熱を加えると色が変わる！　焼き緑青の色見本ができるまで

①胡粉を溶き、和紙の貼ってあるボードに地塗りをします。

膠を入れ練りあがった胡粉。

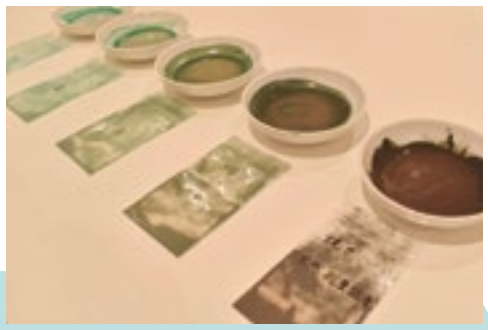
連筆という、何本もの筆が束ねられたような道具で塗っていきます。

②緑青（天然の岩絵具）を火にかけ、焼き緑青を作ります。



緑青をおたまに入れ、電熱器で熱を加えます。

30分以上熱していると……なんと、こんなに黒くなりました！



熱した時間が異なる4種類の焼き緑青が完成。溶いてみるとこのような感じに。

③はじめに地塗りをしたボードに塗り、完成！

筆で順番に塗っていきます。何度か重ね塗りすることで均一に絵具がのります。

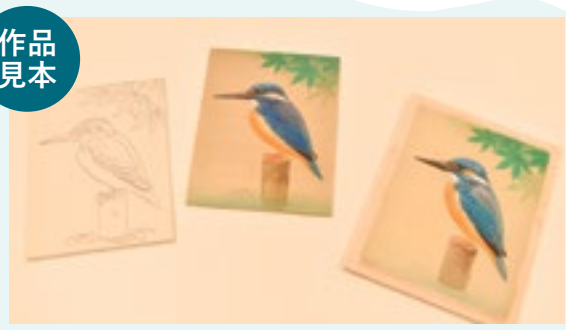
乾いたら完成！　色が濃いほうが、よく熱した緑青です。なんて美しいグラデーション！

ほかにもこんなものが入っています

画材の見本

岩絵具をはじめ、日本画で使う様々な画材の見本セットも用意しました。まるで宝石箱のよう。

作品見本



坪田さんによる日本画の作品見本。左が和紙のボードに描いた下絵、真ん中がそれを着色したもの、右が木の枠に張った絹（絹本）に描いたものです。とても美しい作品ですが、もちろん「さわれる美術館」なので、実際に触って楽しむことができます。

ボランティア日和

心に残ったこと

2003年4月「ホノルル美術館所蔵　浮世絵風景画名品展」で、ボランティアとしてのスタートを切りました。

大切な一枚のＣＤがあります。それは浦上春琴が七絃琴を弾く父の玉堂を描いていて、賛には玉堂が書いた漢詩があります。2016年「浦上玉堂と春琴・秋琴　父子の芸術展」の作品で、玉堂が「烏帽巾底に白毛浸し」で始まる七言絶句の漢詩を詠んでいます。この作品を見た時、玉堂は七絃琴を弾きながら漢詩を吟じたのではないかと想像しました。詩吟の伴奏は、尺八と琴でやりますので、よし、この漢詩に節をつけて吟じてみようと思いました。趣味の詩吟の知識で自分なりに節付けして、ボランティアの学習会の席で披露しました。後日、私が吟じたＣＤをいただきました。思いもしなかったプレゼントは、大事な宝物になりました。

2011年「浅川伯教・巧兄弟の朝鮮の陶磁器展」のギャラリートークが終わった時、お年を召した御夫婦からサインを求められました。学芸員ではないからとお断りしましたが、記念にしたいからと差し出された作品リストの余白に名前を書きました。まったく予期せぬことでしたが、嬉しいようで恥ずかしさも覚えた出会でした。

企画展で色々なジャンルのギャラリートークを経験しました。ギャラリートークは、毎回、ああ、そうなんだという新しい発見があって、知る喜び・知る楽しさを味わってきました。17年間のボランティア活動は人生を豊かにしてくれました。

［ボランティア　１期生　天野秀男］

高久さんのこと

一般財団法人高久国際奨学財団の代表理事・高久眞佐子氏が去る4月19日に急逝されました。2015年の「開館20周年記念 初期浮世絵展―版の力・筆の力―」以来、当館はさまざまな形で同財団よりご支援をいただきました。とりわけ昨年開催した「ミュシャと日本、日本とオルリク」では3年間にわたり助成を賜り、難航する展覧会準備を支えていただきました。

高久さん（親しみを込めてこう呼ばせていただきます）とのご縁は、河合館長からのご紹介で始まりました。「千葉市美が好きなのよ、私」と展覧会ごとに足を運んでくださり、友の会のバスツアーにもたびたび参加されました。人懐こい笑顔と賑やかな語りで、その場を一気に明るくする達人でした。思い出されるのは、好奇心いっぱいに展示室で作品をご覧になる姿。「私ね、やってみたいことが山ほどあるの」が口癖で、時間がいくらあっても足りない風情でした。明るいメッシュのヘアスタイルやユニークなデザインのメガネ、色鮮やかなパンツスーツが実にお洒落だったのも忘れられません。「高久さんはどこでお買い物されるの？」などと、スタッフと話したのはまだつい最近のことです。

ご支援をいただいた展覧会のひとつ、「ジャポニスム－世界を魅了した浮世絵」は延期にはなりましたが、準備が進んでいます。ご覧いただけないのが残念でなりませんが、アートの力を誰よりも信じた高久さんのお気持ちに叶う展示を目ざします。長年にわたるご支援に改めてお礼申しあげるとともに、心よりご冥福をお祈りします。

［上席学芸員　西山純子］